

早川英美子先生の研究に対するコメント

愛知教育大学 山田篤史

一般的には、児童の学びを豊かにするための指導方略として、各教科と総合的な学習の時間との連携を図ることは望ましいことだと思われる。ただし、もちろんその「連携」の中身が問題になる。例えば、算数で学んだことを総合的な学習の時間に無理矢理適用したり、総合的な学習の時間で学んだことを無理矢理算数の学習内容に結びつけたりしても、互いの指導目標を毀損するだけだろう。

その意味で、早川先生の実践における、総合的な学習の時間における学習内容から算数に関わる課題意識を掘り起こすプロセスは非常に素晴らしい。全体的には算数の学習プロセスを踏みながらも、初発の課題意識は総合的な学習の時間の学習内容に根ざしているし、資料3のような学習計画表を作る作業なども、総合的な学習の時間の学習成果が大いに効いているようにも思われる。こうした導入であれば、子どもたちも、算数との連携に対する無理矢理感を感じにくいのではなかろうか。また、「田んぼの広さを比較する」という課題からは、他の様々な算数の学習内容が連想されるため、指導を考える立場からしても想像力をかき立てられる。例えば、子どもたちが苦手とする a (アール)、 ha (ヘクタール) 等の面積の復習はできるし、取れたお米の収穫量が記録してあれば「単位量あたり」の典型的な課題に繋げることもできる(他にも、田んぼを耕す作業時間が記録してあれば「分数のわり算」に頻繁に登場する1時間当りに耕す時間を求める文章題を作ることでもできると考えられるのだが、田んぼの面積や耕す時間を分数で表す点に無理があり、こうしたことは上述の無理矢理の適用の事例になると思われる)。

さらに、早川先生の実践では、実測が試みられている点が素晴らしい。資料13の児童の感想にもあるように、5年生の多角形的面積の単元は、直近の既習事項を活かして、次々に新しい多角形的面積の求め方(や面積公式の導出)を学習できるよい機会なのだが、それらが確かな量感や具体的な量の操作の経験を基盤にしているかについては児童の実態に依存する。その意味で、生活経験が乏しく様々な量感の発達も十分ではない児童にとって、実測は、量感を発達させるよい機会となるであろうし、面積の学習では是非試みたい活動であるはずだ。もちろん、実測には、ある種の煩わしさや計測誤差の問題もあるだろう。しかし、最近では、Google Map を使えば上空からの写真や地図は容易に入手可能であるし(資料1は多分そうなのだろう)、実測の結果を地図上で確かめることも容易であろう。そうした学習は、実際には6年生の拡大・縮小で指導される内容なのかもしれないが、現実的には社会科の地図帳や資料集で同種の内容に触れているのであるから、逆に、総合的な学習の時間を利用して、ここで素地的な学習をしてもよいのではなかろうか(例えば、平均の指導で登場する歩測による計測と絡めた指導などを考えてもよいだろう)。

このように、早川先生の実践は、児童のみならず我々教師の想像力をも刺激する。こうした様々な実践を今後も試みてもらいたいと切に願うところである。